

桃浪也院日記

中

特別

14

1919

521

35

40

45

50

明治二十二年五月以降

○

十七日

朝六時坂口五郎藤山銀太郎と新潟を去り岩船
 郡村上へ赴く同所へ洲合生へき山形岩船両郡迄
 親会に臨みんと欲せり此日終日细雨霏々
 氣鬱々として病を醸さんとも中余は午時六時
 村上へ入り丸屋に投む百武平八、青山佐市等
 来談終り相推して去源は悉く同好会の手を託す
 佐藤市衛瀧波重兵衛来訪談笑深更に
 至りて旅寓に帰る今夜又書きて人秋野左門

渡辺晴等来り宿を蓋し懇親会を利用せん
とす。為め一々其意余等と同し

十八日

百武青山朱説を海況一臧、栗山彦三郎、佐藤力作、大川流等又踵て来訪、夜野左門も亦来り接去百武等と明日を期し同好舎支部設置の相談等を一々し書を約す、坂に共々小田長四郎を山邊里へ訪ひ其の機織工場を見る、帰路佐藤伊助を訪ひ午後二時より百武等と本町の紀一院へ帰る、安泰寺へ参り余らも百七十名、内山形、西田川より来り、この傳ふより之を聞きし席上需る者トて一場

の信託を承りたるも又新派も又信託せしむる互に是余を利用しむる心あると余の性格の記す能くするものありし何れも余の考ひを披瀝する能く、徒尚何れの一方も此余の偏を、扱互ひに相睨み、清極の目的を達せしむるを以てし、と初夜方甚しく、降参の儀あるに復る能く百武等来訪余等を強て勾引して先源の宴を張る席上、横山又三郎も余も

十九日 曇

百武青山、海況、佐藤彦三郎等来訪、小宴を開く、新派の真家、高山崎利夫、又来り、余を、今新藤山、山崎と共る、然るに降参即ち書を、藤山

み托を、三日市に差遣し、後後今の事を問ひ、
後本も同好舎共仰没立のお体舎坊に充てたり、
満福寺より此寺の普洞宗の伽藍を遷す、
一見の價値あり、其の後るる、
よりして地眺まらん、
極ありし、
支那法を、
同好今の起方を、
き席上又、
我々の、
蓋し此地の民俗殖産を、
農商工業の事を論、
偶然ある

改進論、平民論、
傳の書数巻を、
旅寓する

二十日 晴

書七百武に授けて別を告げ、
林を秋を別ち、
四井を訪ふ、
驛の赴き、
本日貴人の訪問あり、
内淵の温泉の開揚式を、
らんと赴く、
行くと余も興ある、

たことを約し湯澤の逆旅村をたどりて午後三時
車を轍をゆく此の湯澤の橋より下水の村を距る土
と十二三丁計を前向る時立ちたる快楽あり
其のちの腕を冷まの深澤あり之れを隔て
宛らう十半島の形を為す。やむ即ち温泉の湧出
の地あり数十年前此地は湯澤の氣ありを知る
形澤の高某採掘したるをあらうしよ成功あり
あらうしよとにふ其の試掘するもの七あり
此の地より三島印の採掘高か存す人をもよ
試掘初め功を奏しおてい金一十萬の地を
没すの計畫をきき書りて以て祝言を言ふべ
りと云ふ來る所の二百名ありつるものらん假し處

と流して此の酒肴を置きてこの宮中の如終極大
を打擧ぐることを答へたり届きを見えたる来觀
者四百より群集ぬらん大衆を見ゆる思
をりしより酒酣するに数人の妓屋の歌あり
を奏る群衆之れを聞きてあはれくしと云ふ
歌ありを徴し余は一掃の清後と流す高のま
由とく群衆のたふす立つて簡なるは清後と云
曰く此の形爛たるも此の勢ありしは湯澤の
下もを懐かししものたるをよきしものなる
形ありしは湯澤の流澤保美心を誤りて
余を向りしと流る地なるものなる思ふ
余より尾流の心より由りしもの余よりしよ王座なる

きんごの八余りもむ体之瀝濁し湯治を命ぜり
るしめりナホ更ら求めりも月より未なりと云ふ其の
如く此地の群集もらん此地の如く其の如く云ふ
これを余の危お後後をさるる鶴矢を云ふ
こゝに今もあつて湯治のゆり書を其の如く
投を

廿一日 晴

湯澤を尋ね途次佐藤玄信を訪ひ上屋事を
話し自著改道論等を贈り十時羽を投り
岡井守花とせり岡井伴之丞を訪ひ書を
託を之に授け丹三つをいひ

廿二日 白

丹三つをあつて中条元者宛らり村山忠成に
託せしものを飲せしめて同好会の方を渡し
袋集のものを託を十二のころに車を働せし三日市
ろりし極るを投を其の如く後浮村宛ら元来湯
治後を其の如く授けしもの如く情をすき人を當
極る派し口地留るをめりるもの如く近人の如く
眼を其の上りて其の如く其の如く其の如く其の如く
いふ事あり命を、と其の如く其の如く其の如く其の如く
の登瀛祝之めを其の如く其の如く其の如く其の如く
の上りて其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
唐女の書を其の如く

廿三日 晴

今朝大津屋に於て政郎とて其苦味を吐く曰く上
句を多き事ありまゝにみゆらむ。今又多き事あり
る非き相合る所の溝所は阿印常木路也す
と高瀬と才三の哩を如し以て信は心をも
き又回の心交り深きものありとてあはれ
せむ。上野の書る接を本も并に白村の河原
後夜をともみくをゆるを夕陽中も接を
渡りてあまの心をよめる二おあまの序上一橋の
信はとてあはれと別を先けるなり。二言中
吟の心ゆらむ句はつるをゆる。親も多き事あり
く寺院にを神降儀とて三言の人と定む。余

の信はとてあまの心をよめる二おあまの序上一橋の
リ入り込みたり。接子もあまの心をよめる
構い木田派のまはれと徳草の妙実を編動を
也徳草の妙実中一の際くソロク妙実を初とて也
石や西の打定とてあまの心をよめる。矢は捕
てはあまの心をよめる。抱腹の心やとてし
余も本々の信はとてあまの心をよめる。記
の自は後しとてあまの心をよめる。才三の
者と接するゆへに本信を移し。二言の心
獲りてく

廿四日 快晴

本日分用を赴く約あり。先方の都合なるは見え合

村松より赴き海老原に接ぎ、坂に五里程、路を
なぞり片桐道に半里程、路をなぞり、
改道後、後を帯び、おのゝろく、未だ、
人許、先づ、大は物々元周、
及び余、改道、
路、
此地、
田印の作、

廿七日

晴

宿酔、
極、

納、
来、
下、
路、
七、
る、

○

六月八日

晴

本、
り、
九、

政治信託の面を初めてとて、有志者の氣
は、禪正寺と云ひ、信託のある改進政治
院、改進主義の書と大書と、燈籠を掲
げ、どう寺院の、西郷の、さう、サセ、
燈籠、年つと、掲げ、何れも、着、順
正、改進、の、文字を、書し、斯くて、煙火を
全国、の、衆、の、ま、の、ま、の、ま、の、ま、
を、余の、皇室の、尊榮と、一、を、演、
説中、皇室を、の、感情、幾人と、日本人、の、
傳性、と、試、今、耶穌、や、佛、の、像、
之れを、下、下、下、余、取、之れを、
下の、御、像、と、如何、下、下、置、く、を、
と、

一、殿、の、至、り、聴、衆、中、其、の、踏、を、
お、の、ち、余、の、其、の、皇、家、の、不、
禮、の、言、を、放、つ、の、國、賊、と、
此、を、し、の、満、堂、の、藤、衆、ハ、サ、モ、心、
を、表、し、拍、手、喝、采、し、た、る、を、余、も、
し、の、毛、禮、儀、大、同、派、の、壯、士、と、
リ、免、角、彼、派、の、斯、の、心、の、物、あ、る、も、
の、不、承、の、語、を、お、の、ち、黙、許、し、た、る、も、
と、云、ふ、今、夜、老、村、新、治、の、家、の、
十一日 晴

と、余、等、を、懇、長、し、且、つ、其、の、山、易、め、
と、余、等、を、懇、長、し、且、つ、其、の、山、易、め、

村のあり志者夫村新次、京都に在り一来り訪ふ、
信長會合時の支村の控部を二のり、三のり、四のり、六
のり、八のり、九のり、衆の所を三箇の地をまきまわす元
ち暮らう大目、過も三四十元、入る方う居りたる如
く、未だ信長を妬め、まよく宣望を極めたり
輕く會する人、押合を先するや大同連の口を拵て言ふ、
いさゝか口を放ち、坂根の如き縁人と、妬まえて、くんとえ
分論ををみ、まきまわし、大信の信長、すまふ、陸家
に代る、三信太故の勢、湧き、信長、於、序の坊、免、あるも
各々、ウ、ウ、と、絶叫し、相和して、妬げ、ゆ、いと、おひ、子、大
故の、ゆ、方、き、の、壁、を、遮、り、ん、て、え、合、書、せ、れ、余、の、部、隊
は、信、壇、を、登、り、以、て、於、衆、目、の、目、を、太、故、の、勢、も、極、

れ、ゆ、り、の、如、く、敵、を、邪、魔、と、も、思、入、り、し、よ、と、ま、ぬ、く、余
の、信、壇、中、の、坊、を、え、ぬ、も、甚、く、ゆ、る、ま、人、の、勢、免、者、の、
子、を、有、る、退、場、を、余、を、ん、ん、たる、程、を、し、し、も、え、合、分、人
んと、え、る、所、を、て、し、を、も、た、る、余、の、事、の、信、壇、は、
息、弱、勢、薄、り、て、其、の、勢、を、拵、ひ、たる、信、壇、の、所、の、堂
造、り、動、も、ま、ん、の、聲、勢、を、進、ま、せ、り、す、と、さ、り、叶、内、の
人、民、を、領、を、よ、り、す、ま、き、を、以、て、さ、り、去、り、ん、余、の、信、壇、
説、に、深、く、所、内、の、人、心、を、投、ト、た、る、も、他、を、し、信、壇、信、
を、才、を、た、る、は、ま、る、も、お、お、知、を、を、信、壇、を、し、陸、家、の
三、信、太、故、の、お、ま、ま、り、信、壇、を、し、又、家、根、を、ホ、ホ、カ
を、以、つ、て、信、壇、を、向、ひ、妬、り、る、を、マ、キ、た、る、何、事、の
兎、然、と、信、壇、を、向、ひ、妬、り、る、を、マ、キ、た、る、何、事、の
信、壇、の、内、を、家

ふまのあつたかゝりて其の西に臨むる極めて
野鄙をのりて東を見下りて其の南に中の人
の向ひてしむるやと謂ふるアソコは大同の
事と云ふる所を斯るも海軍の戦艦を動かして改修
の事と世に知らしむるを謀るる一戦を興
しけり余も此を謀るる或は云ふる石杯後
もさしむる女と云ふる意を用ひて其の元後を
清ひて是を起す事と云ふる酒酣する
衆の末の者し起つて一塔のつら度をもるは其の
雷鼓の如く支那人の信を議を作さるるにたし清
をまゐるる不さるると云ふる姑妄をあるもの
だしい姑妄をあるものに聞かると云ふんことを

人の姑妄●をまゐるるの身と云ふるを言ふるは
のち清の姑妄をあるもの身と云ふるはたし清
をまゐるる不さるると云ふる姑妄をあるもの
は板屋の事と云ふるは其の事と云ふるは
とせよは其の事を清を、有志者の報をたし清
の大同の如く可くは其の事と云ふるは
さしむる一と云ふるは其の事と云ふるは
余をまゐるる不さるると云ふるは其の事と云ふるは
中余等を擁して是を起しんと云ふるは其の事と云ふるは
たし清の如くは其の事と云ふるは其の事と云ふるは
能ひて其の事と云ふるは其の事と云ふるは其の事と云ふるは
敵をたし清の如くは其の事と云ふるは其の事と云ふるは

坂に大津と中浦原郡木津村の改法法流を
論じ、我輩四方名能今爲の田道守と云ふ余
ハ文勇論と云ふ題を以て論じ、武勇論と云ふ
書の一柱ありしを論じ、武勇論の改法法流を
先要と云ふ、武勇論の武勇論は其の流の武勇
のありしを以て道理を以て論じ、武勇論を
懼るゝと云ふ、文勇論と云ふと云ふ論を以て論
り、後、我輩四方名能今爲の田道守と云ふ
序上二場の演説を以て、夕陽論と云ふ、武
判、大津と中浦原郡木津村の改法法流を
舟に以て論じ、

○

七月六日

天王村宗家子赴き、高橋清太郎と海流中、九月一
日、更なるも、金田の内、田道守と云ふ、

七日

水原溝、我輩四方名能今爲の田道守と云ふ、
の演説、我輩四方名能今爲の田道守と云ふ、

十四日

七月六日、一日、午、山、寺、の、寺、領、原、の、純、武、勇、論、
の、演、説、を、以、て、論、じ、武、勇、論、の、武、勇、論、は、其、の、流、の、武、勇、
の、あり、し、を、以、て、道理、を、以、て、論、じ、武、勇、論、を、
懼、る、と、云、ふ、文、勇、論、と、云、ふ、と、云、ふ、論、を、以、て、論、
り、後、我、輩、四、方、名、能、今、爲、の、田、道、守、と、云、ふ、
序、上、二、場、の、演、説、を、以、て、夕、陽、論、と、云、ふ、武、
判、大、津、と、中、浦、原、郡、木、津、村、の、改、法、法、流、を、
舟、に、以、て、論、じ、

濱に大回流の音を鳴を渡破を終りと此に船を
を大和橋の五千中浦原即ち支那の合資大
集席上余の社会の刺戟と云ふ事を信じて
と大坂の佐々木此の三十大信甚と先河を以て
又十二の以本林は海に渡る能くおまする
あり

十五日

七の六信佐々木此の三十大信甚と先河を以て
と大坂の佐々木此の三十大信甚と先河を以て
又十二の以本林は海に渡る能くおまする
あり

織ののちを余のちの録まう近十者村壽余等
のありの技を近十者村壽余等の
筋は去るの車より帯職村のあり此の四を流
行のそとより余の皇室のそを新いといふ
途を担ひていられし中を流るる後流るる
のこを流るるし流るるすまは合資大の少なる
窮し流るるるの流るるの流るるの流るるの
めんししを流るる流るるの流るるの流るるの
その年を流るる流るるの流るるの流るるの
へまうて曰く先刻一夜の代流を許さうといふん
と起るる流るるの流るるの流るるの流るるの
日やまうていふ思ふる流るるの流るるの流るるの

一題を敷衍してちめらるる海子も善支るるの
う改めるはくも甚ししとて宮中より一語を
くと序せらるるをいふとせしとせし自序の人
法まゝの如く法法の法しとて一回失笑り余
故く多事項の海にさるるをいふ非序の熱心
以て皇宮の事を論じ大いに前者の或初を悉
き起ししり余論の本誌をくすに衆人起り
分ち同命を委さるる余の序上世帯人士の情
みれんき方針を論じ大同と改進主義の区あを説
き大いに唱来を扱ししり余の序上世帯人士の
情をいふ和國の友を見らる余の政治原論を
詳密に論評し迎來の好著とすし 楚科 圓家

の起原を述べて我を論じしをなぐくと非難し
りしり善し高橋中郎の批評よりいふ高橋
ハ神祕教行者たるに進化主義の義を必らして
理りしり

十六日

朝来青年数輩来會余の教育上の事を説し
青年の務を論じ主人置酒十のひよもいも其を
徹せり十時漸やく暮りて事なう上りて了る
見附のよ着茶新立ての扱を家坂徳衛八金井
誠一郎等出て、迎ふ二回萬次郎房井一川上
一郎、寺都宮長一寺来り余をも喫飯後智徳
寺にりる本りの演説會場とす 於衆は無事

七八百名滿場三鎗の地まゝに塞りて瓶士又
ハ名の名をきく昨日の寂寥をいひて各々長濱迄
とまるといふに余は條約改訂の事立派に
とあるにせよと云く此を悲憤慷慨の流し後
任事所の不徳を痛撃すといふに驚く立派心を激
し三十餘名の反動者ハ力を極めて置きて正ん
以つて余の信託を妨げんとせんとし數百名の
喝采ハ之れを壓倒し一時の協力を得る事
極め罷衆の反動者ハ口惜しく思ひけり中二井
士殺せ杯叫ぶ声を聞けり當日の信託は
珍らしき事なりといふ夕陽に
新喜の揚るる事なり北橋の眺生
流るる流

係極まり爽快をきく一層さうらの七十餘名
一ハ各々二塔の信託をきく外山林ハ宇都宮
別席の痛打二ハ各々寝る能く

十七日

本島山と本島入土合利相言の構をきく
の事を振舞ふといふに
河上房井と本島入土合利相言の構をきく
あつて信を捕くといふに

十八日

本島入土合利相言の構をきく
西照圃三郎山に達太郎廣川社二大橋蓋郎三輪
浦大井寺来合利相言の構をきく

持る。是くも、
條の政心を堂上流同致と云々の事ありしを、
と堂上流同致と云々の事ありしは、
あつたこと、
昔の事、
らんしと云々の事、
田中危、
関する、
岳を、
ま、
本を、
流、

廿日

を所、
悦、
一、
所、
申、
来、
一、
と、
し、
の、
余、
余、

の近状を報ず、本社小倉の事を托す、廣井一の言枝
と據す、本日酒屋村の改法を為すの約あり大澤飯丸
等と行く、木村忠太郎と遊小、此地反對派屢々演
説をり、反對の氣鼓積り多し有志者妨害を與
戒す、余の條約改正論を詳論す、今夜形多し要
件あり起夜台終るの後和服を脱しし行儀介
を下り、九時形多し着小橋坂にサレ代、の以友と錫屋
尾より少し小橋の東京政況報先あり、来廿日近
縣(土佐)聯合会を形多し一あり決す又多田三
郎と車多し、根き久地と改法後後分を多し
事と決す、情毛後山一の電報の據り書、和島
姉来りて全う多し存り、山多しを多し終り候す

と傳相諾を遂げん、の為めす

六日 小倉講義会にて、三帝國憲法を講す、佐
藤伊三郎三強等、今し北浦原全部起、地多しの
計畫をり、午後安田小、此地有志者全を講
所、聘し、言術会を用、えとす、今日、即ち其の
基会あり、余の席上、三帝國憲法を講す、懇更
会、志田東佐、遇小、珠山大愚和泉の件、付書
を以つて面会を承ふ、故ありて他日を約す
七日 喫飯後安田と辭し、形多し、五つ、更し、多し
常根の演説会より赴く、坂に大澤小倉中津安井藤寺
来会す、会場、明批言寺、多し、聴衆五百計、余ハ
親補回復を演じ、此地新衆切離し、絶し

薩摩大目申田より不幸を招くものありし條約の事
事件の形も七郎の冷淡の者もあらざる世評紛々たる
終に薩の其一致を以て鞏固し金に大隈を助け公使
及對を表すものありし之を放棄するも改正事業
ハ之れを成就する事決しなりし又昨日伊藤辭
表を呈すもやまらば横濱に在りて大隈ハ
之れを推して同家より到りぬめの程も友人も頗る
否々たる顔をもてありしものほつらふも喜ぶもを
帯び酒酌の交りし友も世道衛を後に残し其の
ありしお推して大隈も山縣もあつたこと
(十二日附の書状)伊藤も山縣ホの止ちるを肯んば
位も心或い金に危機を決するも七計り難いと云

辭書ハ唯病氣云々とありし且大隈等一語し
ても暫らく民間より下も井上は薩等の如き者物
ハ力もつた時さし居りし(十三日附書状)
之もさし之れをいふは内閣の言りも信の
さしつた似たり 砂川も書電一行の如く
報しあるは砂川も電報あり曰く是れは
止めざるは家来より更にも電報あり曰く初氣
多しなりぬし是れの日も怒り御座るは
の事なりしは東は其の妻は其の事なりし
あり余ハ其言を解する能はず其言も物なり
十七日 阿部厚介其言をとり来防政は其の
打合をとり伊藤も其言をとり上りし金も其

砂川無書不接す一讀愕然和是電報の類々なる保
然とあるを知らず其の書面の大意を問く

是に即ち七元銀り在勤中四子因計和浦し若三
の文いき人七元を自白しちり然れども未だ銀り
部内の秘文の属したるを其を意沙得る事なき
や決せしむるが建つる未だせよ云

讀みゆるとある家ありてを報列事曰く是れ是
故執ふと余の砂川の書(砂川の家あり保保人
の此書状をわく事)を讀みて然る自決する
と之を久し其の事ありては計りて今年に於
て又秋も是と云ふ事ありては計りて今年に於
て可く唯此四子因計を念ぬらん其れ銀りの

かすの委せん余のやまの社ける行の也或は地
際之上故砂川と事を謀らん其れ北城金の作り
を許せし事ありては計りては計りては計りては計り
う之才の情波砂川の支理系を其れを
せん余の進退の上とありては計りては計りては計り
へん其れ後に行くと決する事ありては計りては計り
めん其れ後に行くと決する事ありては計りては計り
即ち此の事ありては計りては計りては計りては計り
去秋を祝する事ありては計りては計りては計りては計り
又けり其れ後に行くと決する事ありては計りては計り
故に余の事ありては計りては計りては計りては計り
何く人の名を保せん其れ事ありては計りては計りては計り

何の由と山田曰く進むべしと西郷曰く今更進を
の論を要せず勿論進むべし大隈曰く伊藤の辞職
を友情を以つて一旦過さるも肯んん其求め
るに應ずべきの西郷曰く勿論辞さしむべし松方曰く
四半親難の時よりして辭職せんとする伊藤の心
事こそ怪むべしと大隈又曰く然る諸人共其責
を任するものと列席皆曰く勿論云々とあり近頃の
宝行知るべきなり、演説会の事を慶報し家
歸り、電報を接し山田の在京を知り、若電滯京
を慥む、小倉を招き山田を傳ふべき事を托し荒し
山一上坂する能はずん小倉直る上坂すること又
の家弟も照了の書を裁くと托す、山一より返

電あり滯京を誤するの巻を得たり、坂口来訪明
日向根の聞く演説会の事を云々してあり、伊藤
三之介人を以つて余を酒樓に招く事故ありて行ふ
真嶋夫婦来りて前日結婚媒妁を謝す、山一
此の事を書き裁す、今夜東京より電報あり曰く
大隈佐渡を關外務省の門前に暴行の愚い
爆烈弾を投やんたるも左の足部に微傷を
負ひたるのみ生念なり、關係なきと嗚呼
頑達固陋の徒此の暴を為する事、愚い
十九日
掛曉小倉来りて別を告ぐ、本社坂口十橋と立縣聯合会

の打合をすまへ、本日安田講義会に臨むの約あり、俄ら
白根達役等々臨むの必要起り、上野より安田行を
托し余は坂口と共に白根に赴く此地大目流の跋扈
ある所及對の氣候稍々燗入り、余は坂口大津
と交々起つて二題を演し、知事會後、後急行
新潟より歸り、明日高塚講義会に臨むの約あり、
リ帰定後波多野の電報に接す、島田三郎病
の東歸し能くすとあり、返電を發し、東歸す
縣を托む

二十日

大隈伯の駐留の電文を發す、本日高塚に赴く
約あり、又加治の辭しんとす、相伴を發す

ことを約す、刻来りて、中塚を去り、余は是づき、
途中中塚の思ひ波田、島田、志之、田村、植島、小
木曾庄共等の書を傳、十一時頃高塚に抵り、村心
長太郎来りて、後送會の事を伝、講義に臨む
は有、此等入信送會を、あくの計畫あり、一法と決す
あり、乃ち長生術、山水の變遷、二題を演す、中塚
が況より来り、中塚より、より、更次、又来り、共に長つる
は接す

二十一日 一番漢語を、おぼへ、悔る、山一、小波の書りな
接す、小波の件、山一、おぼへ、す、とあり、家大人又書
を、あて、し、余より、上野を、來、し、波、あ、り、電、報、を、つ、て、未
ぬ、し、難、き、事、を、先、く、高、塚、ま、り、一、つ、ま、り、て、信、送、會

一銘の肉、一籠の酒借、く、暖を取、て夜ぬ

廿四日

今朝新聞紙上里田總理大臣辭職の報を載す。廟
王の紛擾想像す。一、度井河上大崎二六郎等来
訪、上縣連合会を提出す。一、議定書を協議し、一
時退り、次別を告げ、汽船、夕、晩間、帰宅、山一
小倉の電報、又、播、す、山田大坂、一、行、れ、ぬ、小倉大
坂、一、五、及、委、細、二、三、日、内、ワ、カ、ル、一、又、廿三日大坂、及、
十八日の晴、電、信、し、回、く、一、豊、次、郎、一、思、上、砂、川
一、男、一、す、多、分、内、流、る、一、一、模、様、委、細、郵、便、
一、と、ち、う、人、を、取、一、極、一、小、橋、等、一、遣、一、其、の、来、会、を、
一、求、む、頃、刻、一、と、留、来、る、佐、と、未、松、持、又、来、る、一、云、す

則ち開校式の次第提出、改定等、を、概、概、し、て、別
一、午後、又、小倉の電報、又、播、す、一、井、後、の、事、考、一、置
一、け、委、細、郵、便、と、ち、う、山田順一電報、を、以、つ、て、一、結、語、を、
一、合、會、の、出、席、一、人、員、を、報、し、来、る、一、山田一郎、今、夜、長
一、岡、著、の、電、報、一、一、報、一、送、す、

廿五日

本日、俱樂部の開館式を行ふの吉日、を、以、つ、て、
一、朝、起、ま、つ、と、同、じ、の、一、百、事、を、抛、つ、て、式、場、一、創、り、是、る
一、若、川、等、装、飾、一、を、た、ん、し、一、金、銀、の、任、裁、一、主、意、外、一、に、
一、所、産、大、り、の、満、意、を、一、表、す、
一、十、時、頃、の、一、到、り、非、條、均、派、の、東、北、日、報、條、均、改、正、
一、中、止、の、一、報、を、載、せ、る、一、號、外、を、配、布、す、一、余、半、バ

疑い半信に電報を以つて報知毎日其意を
質す夫今日我黨の祝日とす斯る不吉の風説
を耳にする事と返す可く不快の耐くても既に時
刻まうらんば穩定の如く式を挙げん
是より先き山田来着の筈らん十二時過ぎる迄家
に降りて見んば果して着しと存り時尚聞合ふ先
かつ二時前前らんば十一時一件の事と山田と根拠
しるる大要を聞きお伴少く式場を臨時山田一隊
の演説をまじり

東京より返電あり曰く屢々会議あり未一決せず
云々歸て又一報の據り曰く三条内大臣が総理大
臣を兼任する事田總理が密院顧問官たる事と決

すと又又一報條約改正の事施行期限を延期す
るの風説ありと電文の授到着なりも縁々その如
く新聞社より三回までも号外を共及する事あり
大河中止派は今日恰も其の總會を開きたる條約
改正中止の一報京地より達すもや彼等狂するや
んまきいん處うる示威運動会を百名餘りの
壯士輩を指揮し隊を辺むし俱樂部の前で喊聲
を起し其状甚だ不穏なりしも館内に入らず通

り。過さぬ

此一隊通り通るを聞かざり一役の壯士奉書包を
持つものを握り来り貴黨の俱樂部を破す
と云ふ言ふまゝんとす吾黨の人敵の惡病なるを

知り受けし壯士再三之んを強ち受けず彼にを
得ず其母持還んことをよと見し、のち思ふおも
破り数方の印刷物を館の外に振撒けり取り
て之をを是れ公條約中止の電報を載せたる東北
日報の號外を以て彼等も又悪戯をなすべしと
ふ余は政治界に入りしより此日の如く苦く歎感
しむることありやせ

夜入りの山一と共なる家へ還るに古き山一の書も梅も白
く大岡流の壯士今夜急上ありを要して暴行をか
へんとす戒心せよとあり此書は先刻俱々ゆかへせし
りも余も在りしりし、由なる家へ轉送しむると
途上何事もなきのうら余は仍れ路を他へ轉

しむるが故に但し、明日は懐くたる、この毎夜
無謀の企一笑し

廿六日

本日、五縣連合会を以ての目より山一と共なる大隈流
劇中の電文案を草し、今の次第等々を言ひ、社書
を讀し俱々ありする、山田と根海、上小倉、及
電し砂川の家第一件、然し其任の程度を以
て区行も甲く砂川の責任、亦併及ぶとあり
本日の如く、余も其の言ひ、サテ、其の如く
リ、有條、其の如く、山田、其の如く、山田、其の如く、
福高、其の如く、佐藤、其の如く、石川、其の如く、
七来、其の如く、幸ひ、其の如く、條約改正運動の

廿七日

宇都宮長一断行連白を携へ来り接す、竹村良貞
波多望、伴谷善四郎の書も接す、小幡坂へ大津
栢と俱来りありて、本日委員八人を附す、其
議案の打合をす、午後七時委員八人を附す、其
年三四月の交渉二回聯合会を高山縣と併くこ
とを決す又一縣二委員二名を置くことを定め
形はある、余と室孝次郎と委員とあり、余は
各縣の代表ある向つて吾輩の政綱を定むる必要
を論じ書を以つて中央改進黨に送らんことを
遂げし衆望之なる同感を表し余も書状を致
す、ことと決す、会後他縣來會者の為め、言

を行形正す張る、席上里川塩入坂の栢と等と
彼の部署を定む余は明日頃到着す、久保田
正納、日并、小松、一郎を並べ北中南三藩の部
を渡すことを決す

廿八日

左坂の小倉及家弟の書も接す、仔細な事情を悉く
内通期し得る、山一余の為め、三日
日間の滞在を決し余は松尾区を越渡す、こと
を流す、福多望の佐藤春流あり、おと先く西
村村山、珠、山一と小松を旅する、訪を流す
久保田、正納到着、諸話刻々し、辞したる
廿九日

今日山田久保田と菅家の起程を臨むの約あり故あり
て早より小倉の信書に接す仔細に砂川と菅家の顔
末を載す砂川の家弟の保津人なる故を以て到底
賤債の責免れ難く頗る當惑の極なり又余の上校
せざる为大りの後援の持物あり山田の市とて
分法を講ずんども余の境界到底千田の金を
すゝ難し流局丹三つあるは決し
一七余兄弟の為の一言之の力を取ることを諒す則
ち其方を電報して小倉の先令今夜加治の起程
会に赴くんとす公私の事務頗る忙し山一為め
の會を代りて社論を草す十二時山田久保田と急
行加治に赴く途上春雨あり一行大いに苦むは

言者加治は第一場の演説をとりし後山田久保田
を留めし余はついで余の撰の中条ある著して度方
甚しく羨す丹三との誌判を酌量して近人す
呼々多忙に多量余ら十九年来未だ嘗て知
くざる所今夜書を載して後世の爲に投す

廿日

村山未也村濱漢方の事を云々朝参長後西条
丹三を以て初めて家弟の失作を告ぐ山一又来る
頗る肉體する所ありおは決せしは言者中条永盛
亦も亦も一場の演説を以て此地余の弟の
乳園而して演説の口を以て初めとし人會は丸
接し起程を聞く余の日記人多く集まる余は起

つて一場の滄海をやりし山田也又余う我多撫摩るんん
滄海す十二の漢教百九奇をよ一はり

卅一日

早起丹をのむい家弟ふかの法を演し統而并徳を
の貸附を清ふ保く老人病ふ世に決せす乃ち
山田と共る形るに陽る小倉の書に接す七十八録
行の内書を考ふも一紙すう夫聖文雄の書に
接す一ハチ隠るに代りて所を演し又一ハチ書物
改正の現状を報するも一ハチ條ゆる就ていづく
條は問題未だ定まらざる見ふ方延期の條も
是に都鄙の同志者外るを十分考ふを以て
ハ朝々花と交すの境を前進むことありて是に

と云ふも其れに此の題のよき我々の奮動は是の
人事の考すべき大を考し天年を任せざるは
所謂人事を尽して天年を待つこと斯く協念とな
し天下後世の對し一ハチの愧づべきことなり
一ハチ官沛地の同志演るは其れを以て所歴を
其れを以て我々の目的は國家永遠の計あり
此の問題は止まらざるは未だ四五年のありあり
さしつゝあつたことなり

此書物も一見は延期と決したること推知する
をいふし呼々吾人半年の苦辛に遂る水はさる信し比
り道限はんばまゝ加くん板に極たまを便なるは
扱く行ふ山田と家弟のよきを扱ぬし流る丹も

みある金の出金を求めんとす所の名所を記し
へ突出せんことをし強硬の腕を執ることを決す
又條の問答を就して交遊上余及山田の問答も
道長の上請職を勸告すべしと決す



